

世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道



平成十六・十七年度(財)電源地域振興センターマーケティング調査事業活用事例 開発遅れのマイナスをプラスに大転換 「ほんもの」の地域資源で 勝負する日本一大きな村

歴史に名を記す
豊かな自然に恵まれた村

十津川村は、奈良県の最南端・紀伊半島のほぼ中央に位置する山間の村です。人口は約四千五百人、総面積約六百七十二平方キロメートルで奈良県全体の約五分の一を占め、村としては日本一の広さを持っています。しかし村の約九十六パーセントが山林。森林と水資源には恵まれています。一方で地域の開発は遅れており、交通手段も国道二六八号線などカーブの多い山道を利用するしかないのが現状です。村の中心地まで大阪から車で約三時間半かか

り、バス便も少ないなどアクセスが良いとは言えません。村域には、関西電力株式会社の高圧水式発電所(全地下式)である奥吉野水力発電所(百二十万六千キロワット)があり、奈良県全域に電力を供給しています。十津川村の歴史はとても古く、伝説によると村の人々は、神武天皇御東征の際に道案内をした八咫鳥の子孫と言われています。壬申の乱(六七二年)、源平の争乱の元となった保元の乱(一一五六年など)といった史上に十津川の名前が登場し、村内には史跡が数多く存在します。さらに十津川村には、高さ五十四メートル長さ二百九十七メートル

十津川は十年持たない… 村の存続の危機

かつて十津川村では森林資源を利用した林業が盛んで、全盛期には約百五十社あった企業が、二十五年ほど前から急激に減少して現在ではわずか二社になっています。温泉地を中心とする観光が村の産業

を支えてきたものの、近年では景気低迷などの影響で次第に観光客が減り、若者の村離れや少子高齢化で村の人口も減少の一途を辿っています。「現在、村の平均年齢は五十一歳。最も人口の多い世代は七十代となっています。日本の平均寿命が八十一歳であることを考えれば、あと十年もたないうちに村の人口は急減してしまいます。人口減少に歯止めがかからず、生産性も低い地域は、近隣の市町村との合併を余儀なくされているのが日本の現状。何もしなければ十年どころか、五年、三年も経たないうちに十津川村

はなくなってしまうかもしれません」と語るのは十津川村の村長更谷慈禧さん。平成十三年に村長となつてから常に危機感を持ち、どのような対策を打つべきか検討を重ねてきたといいます。十津川村には、これまでに二度の大きな存続の危機がありました。一度目は明治維新の動乱で、二度目は明治二十二年の大水害です。「今や都市部への人口流出や林業の低迷などで、村は三度目の危機を迎えていると言えます。二度の危機で多くの尊い命や財産を失いましたが、村民の大変な努力によって危機をチャンス

に変えて乗り越えてきました。今回もまた乗り越えなければなりません」更谷村長は、危機をチャンスに変える突破口として村の主産業である観光に着目しました。

学部教授の松田忠徳さんを招きました。松田先生は日本初の「温泉学」の講座を持つ大学教授であるとともに、温泉についての数々の著書がある旅行作家。いわば温泉のカリスマ的存在でした。この松田先生との出会いが、十津川村の大きなターニングポイントとなったのです。



十津川村旅館組合 組合長 田花 敏郎さん

「このお湯に入った松田先生は、なぜかけ流しにしないのかと驚かれました。せっかく本物の源泉が豊富にあるのに、もったいないと思われたのですね。この時、私たちは源泉かけ流しの価値に改めて気づかされました」と、十津川村旅館組合長の田花敏郎さんは、研修に参加していた当時は振り返ります。源泉の湯を再利用せず浴槽内に常に新鮮なお湯を流し入れるため、塩素消毒の必要がなく、良質の温泉を堪能できる…十津川ではあたりまえでも、全国の温泉地では羨ましい限りの「宝物」を発見したのでした。

温泉学者・松田先生との 運命的な出会い

旅館や温泉施設に従事する人たちのために開かれた「おもてなしの心の研修」の際、松田先生がたまたま宿泊したのが第三セクターによって経営されている十津川温泉の「ホテル昇」でした。十津川温泉郷のほとんどの温泉施設では、源泉の湯量が豊富なので、お湯を循環ろ過させずにそのまま流す「源泉かけ流し」式を採用していました。いわば十津川ではそれがあたりまえだったのです。ところが当時「ホテル昇」では、わざわざお金をかけて循環ろ過式を採用してました。機械設備によって衛生管理、温度を一定に保て、それが最高の温泉だと信じて

学部の松田先生は、温泉学という講座を持つ大学教授であるとともに、温泉についての数々の著書がある旅行作家。いわば温泉のカリスマ的存在でした。この松田先生との出会いが、十津川村の大きなターニングポイントとなったのです。

全国に先駆け村をあげての「源泉かけ流し宣言」

この「宝物」を生かすべく、村では松田先生の協力を仰いで、源泉かけ流しをテーマに温

泉地の活性化策を検討し、一部の施設で使われていた循環ろ過式をストップ。村内二十五箇所の温泉施設全てで「源泉かけ流し」式になりました。そして平成十六年六月二十八日、十津川温泉郷は全国に「源泉かけ流し」を宣言しました。個々の温泉で「源泉かけ流し」をアピールする例はありますが、温泉地全体で宣言するのは全国的にも類を見ないことでした。また、レジオネラ菌の騒動が相次いだ当時、国の指導で塩素殺菌を行う温泉が増える中、自然のままの温泉は注目を集め、テレビ局などマスコミの取材が殺到して大きなPRになりました。

源泉率、加熱・殺菌処理の有無、湯の入れ替え状況など六項目を浴槽近くに表示し、本物の温泉をアピールしました。「湯量は多いのですが、湯温が五十六度から八十五度と高いのがこの源泉の特徴。水を加えれば温度は下がるものの、源泉百パーセントかけ流しにならないので、うちの旅館(田花館)では地下水の中に温泉のパイプを通してお湯を適温にしています。他の旅館や民宿でもいろいろ工夫しています」と、こだわりを語る田花さん。この宣言の効果は素晴らしく、温泉の宿泊客数が一ヶ月で前

この宣言の後、さらに村内の温泉施設で浴槽の湯のデータを公表する「温泉情報の自主開示」も実施。泉質や効能とともに、源泉の割合を示す



十津川温泉の「庵の湯」は、奈良県第一号の飲泉場と足湯、男女の内湯を備えた「源泉かけ流し」の公衆浴場。

Success Story

奈良県 十津川村 「ほんもの」の地域資源で勝負する日本一大きな村



十津川村 村長 更谷 慈禧さん

「おもてなしの心の研修」の講師に札幌国際大学・観光

源泉かけ流し温泉郷



十津川鼓動の会 阪口 弘子さん

年比の四十六分はも増えました。ところが、村民の中からは非難の声も聞こえました。「村の行政は、温泉地ばかりを優遇していると言っています。でもまずは村に人が来てくれることが大事なこと。そこから波及して活性化が始まるのに、理解してくれないのですね。」しかし、そんな批判も吹き飛ばす朗報が、すぐに飛び込んできました。

「源泉かけ流し」宣言をした翌月の平成十六年七月七日、十津川村にビッグニュースがもたらされました。「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されたのです。この世界遺産は奈良・和歌山・三重の三県にまたがるものですが、村内を通る古道の大峯奥駈道と熊野参詣道小辺路が含まれています。以前から山歩きの客が訪れてはいましたが、世界遺産として全国から注目を集めました。そして「源泉かけ流し」宣言と併せての効果が、観光客はさらに増加したのです。

歩

域力としての温泉パワー」をメインテーマに、全国から温泉関係者や学識経験者を集めてシンポジウムなどが実施されました。第一回「源泉かけ流し温泉サミット」に併せて、村のサポートで村民が中心となって企画した様々なイベントが実施されました。「十津川鼓動の会」が主催した「世界遺産 語り部とゆめ果無ウオーク」もそのひとつ。これは熊野参詣道小辺路を、「ホテル昇」から果無集落まで往復約四キロ、一時間半をかけて語り部と呼ばれるガイドの案内を聞きながら歩く体験イベントです。「十津川鼓動の会」は、村が開いた「語り部養成講座」の受講生たちにより、平成十四年に発足したグループ。世界遺産に登録された大峯奥駈道と熊野参詣道小辺路の被害を減らしました。村への国道が閉鎖されてたちまち観光客が減りました。でもこれをひとつの警告と受け止め、ただ注目されるだけでなく、次につなげていく活動をしなくてはならないと気持ちを改めました。十津川村役場・観光課課長補佐の増谷良一さんは話します。更谷村長をはじめ村役場では、「源泉かけ流し」と「世界遺産」という二つの宝物を村のパワーとして生かすために、さらに村外からの知恵が必要だと感じました。そこで村の出身者であるコンサルティングの専門家と人材育成の専門家を招聘し、村民によるワークショップ「創生塾」や役職員を対象とした研修会を行いました。



十津川村役場 観光課 課長補佐 増谷 良一さん

ところが、順風満帆と思えていた矢先、大雨が村を襲いました。「喜びもつかの間、記録的な大雨が崖崩れの被害をもたらしました。村への国道が閉鎖されてたちまち観光客が減りました。でもこれをひとつの警告と受け止め、ただ注目されるだけでなく、次につなげていく活動をしなくてはならないと気持ちを改めました。十津川村役場・観光課課長補佐の増谷良一さんは話します。更谷村長をはじめ村役場では、「源泉かけ流し」と「世界遺産」という二つの宝物を村のパワーとして生かすために、さらに村外からの知恵が必要だと感じました。そこで村の出身者であるコンサルティングの専門家と人材育成の専門家を招聘し、村民によるワークショップ「創生塾」や役職員を対象とした研修会を行いました。

村のあたりまえが実は宝物 本物の感動体験「心身再生の郷」で村おこし

平成十六年度には(財)電源地域振興センターのマーケティング調査事業を活用しました。その調査結果を分析し、地域の資源の価値を整理し、村がめざす将来像として「心と体を癒す安らぎの郷」づくりが提案されました。このマーケティング調査は平成十七年度も継続され、温泉のさらなるアピールとして「源泉かけ流し温泉サミット」の開催を決定。「心身再生の郷」というスローガンのもと、来訪者に本物の温泉、世界遺産、自然、おいしい食べ物などで健康や癒しを実感してもらおう具体的なプランも数多く生まれました。これは更谷村長が中心になり、役場職員や観光関係者、村民が意見を出し合って村の将来について真剣に考えた成果といえます。第一回「源泉かけ流し温泉サミット」を十津川村で開催。平成十七年十月二日、十津川村に「源泉かけ流し」を宣言した三つの温泉地(北海道

湯

かと思われました。サミット時のツアーは、鼓動の会が企画した初めてのツアーでした。それまでは旅行会社の依頼で時間やルートが限られていたのですが、今は村の観光課のサポートで、自分たちの企画を提供できるのでやりがいがあります」と阪口さん。十津川鼓動の会では毎月一回、語り部の勉強会を行っています。また熊野参詣道小辺路は、お隣の奈良県野田川村・和歌山県田辺市本宮町にまたがっているため、これからは近隣市町村とも連携を進めていきたいと話してくれました。村の主婦たちによる「ほんまもんグループ」も大活躍。このサミットでは、当日の昼食に販売された郷土料理弁当「ほんまもん弁当」が大評判となりました。サトイモや椎茸など村でとれた食材をふんだんに使った弁当を作ったのは、村

食

の主婦たちが中心となって活動している「ほんまもんグループ」です。ほんまもんとは本物、つまりごまかしのない純粋なもののこと。無農薬で栽培した村の野菜や自然のままの食材を使い、村ならではの食品を作って販売しています。同グループは、若い人とお年寄りが一緒に活動する福祉のワーキンググループとして平成十五年に結成されました。「サミットの際は、会員七人で百食分のお弁当を作り、みなさんに喜んでもらえたのが大きな自信になりましたね」と話すのは、「ほんまもんグループ」の平瀬生代さん。それから順調に活動は膨らみ、現在は十三人の会員がいます。「冬場を除く毎週土曜日、五月の連休、お盆に、『道の駅・十津川郷』の前に店を開いています。朝の六時、五十八歳から八十一歳までの主婦六人が集まり、ご飯を炊いたり餅をついたりしてその日に売る食品を作るんです。これを店頭で販売してくれるのが二十代半ばのお母さん方です。鯉節や高菜の茎などが入ったご飯を高菜漬で包んだ地元伝統料理『めはりず

世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道

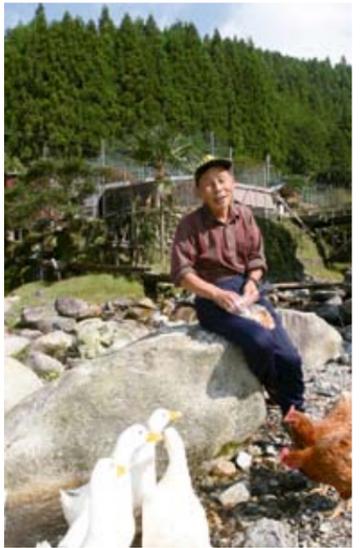


十津川村・果無集落に立つ熊野参詣道小辺路の石碑

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、「修験道の吉野・大峯」「神仏習合の熊野三山」「密教の高野山」というそれぞれ起源や内容の異なる三つの山岳霊場と、それらを結ぶ「参詣道」によって形成され、千年以上にわたる日本人の精神と文化の発展・交流に重要な役割を果たしてきました。この大自然と文化の共同作品である文化的景観が、世界遺産として認められたのです。十津川村内を通る大峯奥駈道は、吉野山と熊野本宮大社を結ぶ全長百七十七キロメートル(村内約三十九キロメートル)に及ぶ山岳道です。また、熊野参詣道小辺路は、真言宗の総本山・高野山と熊野本宮を結ぶ全長約七十七キロメートル(村内約三十三キロメートル)に及ぶ街道です。

(財)電源地域振興センター マーケティング調査事業の内容 平成十六年度

十津川村の観光の実態や地域資源の実情を把握し、訪れる観光客や都市住民が村に何を求め、どう評価しているのかをアンケート調査。村内の宿泊施設の受け入れ態勢の「自己点検アンケート」を実施し、また、世界遺産に登録された屋久島地域の事例に学び、古道の世界遺産登録が十津川村に及ぼすインパクトの可能性を整理した。これらのデータをふまえて村民参加の検討会を開催し、村民・行政・観光関係団体が今後のあり方について意見交換を行った。さらに、観光ビジョンとして、温泉療養を軸とした村の将来像「心と体を癒す安らぎの郷」を提案した。平成十六年度の調査実績を受けて、温泉療法、世界遺産を歩く健康歩行や森林浴などの運動療法、食事療法、観光療法など、村の自然環境を効果的に活かして組み合わせた「心身再生の郷づくり」に向けての具体的な展開案を提案。村民の参画意欲を高めて「心身再生の郷」実現のため、基本方針として「5つのしくみ」(1)人材の育成(2)村の「宝物」の発掘(3)情報の発信(4)村外の応援団づくり(5)継続・改善のしくみづくり)とアクションプランを掲げ、これを支援した。また、「源泉かけ流し温泉サミット」を企画し、「心身再生の郷 十津川村」を村外にアピールした。



村の再生を支える「名脇役」たち

大野・せせらぎの里で観光客に、あめの魚(あまご)や四季折々の料理を提供している前倉さん(写真上)は、竹細工やわらざうり作りなど田舎体験の指南役サービスで大人気です。都会ではなかなかできない体験と前倉さんの温かいもてなしを求めて訪れるリピーターも多いとか。また、熊野参詣小辺路沿いにある果無集落では、岩本さんの家の前にある水飲み場(写真下)が、ウォーカーのオアシスです。湧き水を受ける大きな木の桶は、道行く人のためにご主人が松の木をくり抜いて作ったもの。写真のおばあさんはご主人のお母様で、村の観光ポスターに何度も登場しているちょっとした有名人です。十津川村には、「宝物」と呼べる名脇役がたくさん住んでいます。



「村には専業農家が少なく、お年寄りが自分たちで食べるために作っています。今までは余分にとれた作物は人にあげていました」と話す「ほんまもんグループ」の辻きさよさんは、平成十八年六月まで村役場の職員でした。辻さんはグループと役場の橋渡しをしながら活動を続けています。

地元産の食品づくりでお年寄りの生きがいづくり

「ほんまもんグループ」の食品に使われる野菜は、すべて村の畑でとれたもの。それも多くは高齢者が作っています。農薬を使わずにヨトウムシなどの害虫はピンセットで取り、牛ふんや鶏ふん・油かすなどの有機肥料を使って丹念に栽培しているのです。



ほんまもんグループ 辻きさよさん

「でも今では、新鮮な野菜が好評で販売量も増え、お年寄りがやりがいを感じています。自分の作った野菜をみんなが喜んで食べて下さるので、畑を広げて野菜づくりをしています。人も増えているんですよ」と熱く語ってくれました。「ほんまもんグループ」の活動は、村のお年寄りの生きがいづくりにも役立っているのです。平瀬さんも辻さんも、ほんまもんの名前に負けないように頑張っているといきたいと口を揃えます。

「心身再生体験イベント」に手ごたえ

「心身再生体験イベント」に手ごたえ。サミット後も十津川村では、各種の世界遺産ウォーク、温泉・古道・健康食を組み合わせた「心身再生」体験バスツアーなど、様々なイベントを推進してきました。中でもユニークなのは、平成十八年九月に開催した「なびきツアー」です。これは世界遺産ウォークを中心に、山小屋での宿泊や自然のグルメ体験などができる二泊三日のツアーイベント。受け身のツアーではなく、生涯の思い出となる能動的な体験が盛り込まれています。なびきとは人生の重要な通過点という意味。語り部の先導で古道を歩きながら、参加者が自分自身を見つめ直すことを目的としています。「大峯奥駈道」には、アスファルト舗装されて古道が四百メートル

感

消えた箇所があります。その道に平行して山道を切り開く「道普請」をツアーの中で行っただのです。草に覆われていた山肌が、黒々とした土の道に生まれ変わると、参加者から歓声が沸き起こりました。参加料金は六万八千円から高いのです

いいものがあるだけではダメ ブランド化に向けた情報発信

テレビ番組「ガイアの夜明け」で十津川村の再生プロジェクトを放映

一方で十津川村では、マスコミに対する働きかけも開始しました。狙いをビジネス分野に波及効果の高い番組に絞り、テレビ東京の「ガイアの夜明け」に取材依頼を行いました。政府の助成金に頼るだけでなく、世界遺産の道を活用して村のブランドづくりに取り組

む姿は価値があるとして、平成十八年一月から半年以上にわたって村の活動が取材されました。

「世界遺産として登録されている道は、「紀伊山地の霊場と参詣道」とスペインの「サントニアゴ・デ・コンポステーラ」の二つだけ。この道はフランスからスペインのサンティアゴ大聖堂へ続くキリスト教三大巡礼路のひとつで、毎年世

界中から驚くべき数の人々が、ただ歩くだけのために集まっています。スペインでは沿線の市町村が一体となつて道を守り、育てることで、道の恩恵を受けているのです」と語るのは更谷村長。この道が持つ本当の価値を知るために、村長は自費でスペインへ出かけ、実際に道を歩きました。そしてその様子は「ガイアの夜明け」でも取り上げられました。

リチュアルウォークがブームで、精神を高めるために歩くという行為が見直されています。十津川村は、日本人にその機会を提供できる素晴らしい宝物を持っているのです」と更谷村長。「ガイアの夜明け」では「なびきツアー」も紹介され、「心身再生の郷」づくりへの取り組みが全国放送されました。九月五日の放送時には、村役場のホームページに一時間にわたりアクセスが殺到し、翌日には番組を見て感動した人たちから多くの電話がかかってくるなど、全国に向けて大きなアピールになりました。

官民一体となって村のブランド化をめざす

「ガイアの夜明け」放送後すぐに、今度はNHKから十津

川村を含めた熊野地域の「世界遺産の道」を取材したいという依頼を受けました。日本在住のイギリス出身作家であるC.W.ニコルさんが村の世界遺産を歩くという企画で、世界に向けて十津川村や熊野地域の素晴らしさをPRする番組制作が始まりました。これは英語で世界に報道される番組となります。

「村ではスペイン大使館にも足を運び、十津川村と同程度の規模の世界遺産沿いの市町村を紹介していただきました。このように日本国内だけでなく、世界も視野に入れた村のブランドづくりを始めています。これからは様々な面で、しっかりと村の体制を整えていくことが重要です」と更谷村長の熱意は衰えを見せません。スペインの世界遺産の道では「シャコベオ」という古道産業振興協会が、ブランドづくりに重要な役割を果たしています。十津川村でも、このような産業振興協会や民間団体・勉強会・役員職員らと交えたボランティアアベースでの研究会を立ち上げたことを考えています。さらに、世界中からツアー客を呼ぶ計画やそれを案内する「語り部百人計画」、農作業体験や取れた野菜の送付サービスでツアー参加者と農家をつなぐ「心の家族百人計画」、おみやげ・付加価値グッズの販売など、ブランドは膨らんでいます。

「十津川村が提供できるほんまもんは、訪れる人たちに本物の感動を与えることができます。この感動体験こそ『TOTSUKAWAブランド』で、多くのの方が千年残る事業に参加でき感動したと喜んでいました」と観光課の増谷さんです。手ごたえを感じています。官民が力を合わせた「心身再生の郷・十津川」づくりへの取り組みは、だんだん具体的な形となつて現れてきました。

「心身再生の郷」づくり 関連年表

- 平成13年 更谷慈禧氏、十津川村・村長に就任。
- 平成14年 村の「語り部養成講座」の受講生たちにより、「十津川鼓動の会」発足。
- 平成14年 十津川村が「おもてなしの心」の研修に札幌国際大学の松田忠徳先生を招聘。
- 平成15年 若者とお年寄りが一緒に活動する「ほんまもんグループ」発足。
- 平成16年 十津川温泉郷が全国に「源泉かけ流し」を宣言。
- 平成16年 「紀伊山地の霊場と参詣道」が、ユネスコの世界遺産に登録される。
- 平成17年 村内すべての温泉施設で浴槽の湯のデータを公表する「温泉情報の自主開示」を実施
- 平成17年 第1回「源泉かけ流し温泉サミット」を十津川村で開催。
- 平成17年 「世界遺産 語り部とゆく果無ウォーク」で十津川鼓動の会の語り部が活躍。ほんまもんグループが作った「ほんまもん弁当」が大好評。
- 平成18年 第2回「源泉かけ流し温泉サミット」を北海道弟子屈町の川湯温泉で開催。
- 平成18年 「なびきツアー」開催。テレビ東京「ガイアの夜明け」で十津川村の再生プロジェクトが放映。



お問い合わせ先
十津川村役場 観光課
TEL 0746-62-0001
http://www.vill.totsukawa.lg.jp